

# 一茶の俳句にアニミズムを読み取る

—— 金子兜太の一茶論を参考にして ——

松 崎 慎 也

Issa's Animistic Haiku

Shinya MATSUZAKI

## 1 はじめに

アニミズム詩と呼べる可能性のある表現には、人以外のものに対する感情移入や擬人観という比喩的思考が読み取れると、以前に指摘した。<sup>1</sup> 本論では、小林一茶（1763-1827）の句をいくつか取りあげ、その表現中に上のような比喩的思考が読み取れることを確認し、それらの句がアニミズム俳句であることを論じていく。

昨年二月に死去した俳人・金子兜太（1919-2018）は、長く、一茶のアニミズムを論じてきた。晩年の著書では、感覚としてのアニミズムの重要性を繰り返し唱えている。最晩年のインタビューでは、「これはもう絶対に自信を持って言えるんだけどね、何と言われようと、俳句はアニミズムが基本です。」（『今』63）と断じている。金子兜太の一茶論を参考しながら、以下で、文学表現中にアニミズムを読み取る方法をより確かなものにした。

## 2 〈感覚〉としてのアニミズム

金子はアニミズムを説明して、「全部を生き物と感ずる感性」（『対談』31）、「一つ一つのもものがあって、その一つ一つのもものがみな命を持っている。それに精霊、魂を感じる。」（『対談』69）と言ひ、それを「いきもの感覚」（『対談』111）と呼ぶ。また、「いきもの感覚」を説明して、「物の微に心の誠が触れているという触れ方」（『語る』107）、「物と心の触れ合いの感覚」（『語る』108）、「『アニミズム』を生む人間の生な感覚」（『荒凡夫』177）と述べている。「いきもの感覚」が働き、「相手のものの物象感、あるいは自然感と言えものを捉えたときに正確に心が物に写っている。そういうときに心が書けている。」（『語る』108）と語っている。

アニミズムは一般的に、宗教あるいは思想として定義付けられ、また、特定の歴史性、地域性を持った文化的事象として説明される。しかし、金子のように、アニミズムを〈感覚〉と捉えれば、ある種の文学的表現を生み出す感性を指示するものとして、この言葉は汎用性を獲得する。本論は、アニミズムという概念の、幅を持った定義付けに向けての試みでもある。

一茶から話はそれだが、イギリス・ロマン派の詩人ジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）に現れている、次のような感覚は、金子の言う「いきもの感覚」に近似していないだろうか。キーツの友人で言語学者・法律家のリチャード・ウッドハウス（Richard Woodhouse, 1788-1834）は、

He [Keats] has affirmed that he can conceive of a billiard Ball that it may have a sense of delight from its own roundness, smoothness & very volubility. & the rapidity of its motion. (Rollins 59) (彼 [キーツ] は、ビリヤードの玉について、玉が己の丸さ、すべすべしたさま、動きのなめらかさ、素早さに喜びを感じているのが想像できると主張している。)

と記録し、キーツ自らは書簡中で、“if a Sparrow come before my Window I take part in its existance [sic] and pick about the Gravel” (*Letters* 186) (もし雀が窓のところにやってきたら、私は雀の存在に入り込んで、小石をつつく) と述べている。

〈感覚〉としてのアニミズムがさらにもし、われわれからとうに失われたものでもなく、文化的に固有なものでもなく、人間の認知的な傾向であると論じ得るのであれば(本論にはそのような主張の準備はまだないが)、アニミズムは、宗教や思想と定義するよりも、感覚や感性と呼ぶのがふさわしい。

一茶に戻る。金子が『古典を読む 一茶句集』で、アニミズムに触れながら解説している句は六句ある。以下ではまず、全六句を順に挙げながら、各句に関する金子の解説に検討を加え、それぞれの句に、人以外のものに対する感情移入や擬人観という比喩的思考が読み取れるかどうか点検していく。

### 3 一茶のアニミズム俳句

一句目である。

さはつてもとがむる木也夕涼み 享和句帖 享三 (319)<sup>2</sup>

次に、この句に対する金子の評釈をあげる。

木で娘を喩えているところが巧妙である。「南有喬木」からのヒントだろうが、木をこれくらいに擬人化できるのは、一茶の資質なのだ。後からもいくどでもこの資質に触れるつもりだが、私は〈アニミズムの資質〉と言ったり、〈一茶の身体の芯のアニミズム〉と言ったりする。山川草木、鳥獣魚虫すべての生命に逸早く感応し、精霊を感知する本性。——だから、この木も、涼み台に腰かけている潔癖な娘さんも、どちらもまったく同等に、〈生きて息づいている親しきもの〉だったのだ(『古典』147)。

金子が「『南有喬木』からのヒント」と言うのは、この一茶の句の前書に「漢広」とあるので、この句は『詩経国風』「周南」中の一編「漢広」の最初の章を受けての作句であろう、という意味である。「漢広」第一章の初め四行は「南有喬木／不可休思／漢有游女／不可求思」(白川 71)とあり、〈憩えない喬木〉、〈求められない女〉に着想を得た句と考えられる。この「喬木」は、一説では神木とされ、また、「游女」とは揚子江の支流、漢水のほとりに遊ぶ女性ではなく、漢水の水神・女神とされるが(白川 73)、聖俗どちらの解釈をとっても、一茶の句へのアニミズムの読み取りを左右するわけではないのでここでは問題にしない。

金子はまず娘が木に喩えられていると読む。その読みでは、文字通りの木ではないということになり、娘に対するからかいの句ということになる。それだけの句だということもあり得る。

続けて金子は、木の擬人化とも言っているのも、その方向での読みをここでは試みる。木に触れただけで、自分は木から怪しみ、責められているのを感じる。前書により喚起される、「漢広」中の〈求めること能わざる女〉のイメージが重なり、なれなれしい振る舞いを許さぬ女のような木と、その木の陰に、それでも涼を得ている〈私〉という滑稽な図が目に見え、木を女として見、女に拒まれている自分を笑っている。

〈木がとがめる〉というところに、木を人と見る比喩的思考があるわけだが、もし、〈木がとがめ

る) というのは文字通りの意味ではなく、描写を意図した修辞であって、自然物としての木の何らかの様態を表していると仮定してみよう。すると、句全体を見渡しても、木のどのような様態のことを詠んでいるのかは見えてこない。この句が、木の様態の適切な描写へ向かうのとは逆に、不明瞭さへ向かって読み取りを要求しているというのは合理性を欠く。しかし、アニミズムであるがゆえに〈木がとがめる〉という非合理は可なのだとすれば、その文字通りの読みには不明瞭さは生じない。よって、「とがむる」を文字通りに読む方向において、この句をアニミズム俳句と呼びたい。二句目に移る。

赤馬の鼻で吹きけり雀の子 七番日記 化八 (127)

この句の評釈の中で金子は、「一茶の天性の、そして農家の子として育つなかで更に育まれた〈アニミズム〉が、生きものとの生き生きとした交感の因をなしている(そのこころの姿を〈情〉という)、と前に書いた……。」(『古典』214)と述べる。〈情〉とは、金子によると、「他にむかって開いてゆくこころの状態」を指し、「心」〈ひとりごころ〉という、「自分にむかって深入りしてゆくこころの状態」と対比される(『古典』93)。

「赤馬」の句は、擬人化する言葉遣いがないので、一見、単なる描写の句のようでもある。金子は、作者と生きものとの交感の句と読んでいる。どのように捉えるとそう読めるのか考えてみよう。この句がアニミズム俳句と言える要因は、赤馬と雀という二者を登場させ、その二者が出会っていることにある。赤馬と雀との遭遇に焦点が当てられていることにより、この句の感情移入は、その巡り合いに際して、赤馬が雀をどう感じ、雀が赤馬をどう感じているかにまでおよんでいる。

感覚としてのアニミズムということ、ここでもう少し考えておきたい。例えば、獲物を狩る動物(の映像など)を見たときに、逃げる獲物の必死さと追う捕食動物の必死さを、交互というか同時に想像したりするときの感情移入の状態というのがあるだろう。第三者であるわれわれが、目撃対象の二者を観察し、それが追う者と追われる者の関係であることを認識し始めながら、われわれはその必死さの感覚を——動物が人と同じ心理状態にあるかどうかは不明であるにもかかわらず——心に抱くのではないだろうか。こう言うと、〈そのような感覚に、アニミズムと呼ぶほどの意味内容は〉という批判が聞こえてきそうではある。本研究では、アニミズムと呼び得る意味内容を維持しつつ、幅を持った概念として、この用語を規定できないか探っている。この点は今後あらためて検討を重ねていきたい。

一茶の句に戻る。三句目は、

笛吹て白露いはふ在所哉 七番日記 化九 (477)

というもの。金子の評釈では、

一茶のアニミズムは、白露を神仏のごとくに感受しつつ、笛の音をそれへの手向けにするわざ(法楽)と感応していたのだろうが、「いはふ(祝う)」と言ったもともとは目的を感じさせることばが、逆にまったく無目的な無造作な笛の音の流れを感じさせるところが、この句の美しさでもある(『古典』236-37)。

とある。ここで金子は、感覚としてのアニミズムを越えて、白露を、祝われ、祀られる対象であるカミと感じているアニミズム——信仰としてのアニミズム——を読み取っている。

比喩的思考を読み取ろうとしてきた、ここまでの判断とは異なるが、白露が祝われている、つまり信仰としてのアニミズムが描かれているという点から、アニミズム俳句としたい。とは言え、くどくどしくはなるが、この句での比喩的思考も確認しておく、笛の音を供すれば、供されたことを喜ぶであろう〈人〉——そのような〈人〉として白露を見るという擬人観が現れた表現と言える。次は有名な句である。

やれ打な蠅が手をすり足をする 梅塵八番 政四 (375)

金子の、この句のアニミズムに関する評釈は以下の通り。

双方合わせて、いま目の前に小休止している蠅を客観的にそのままに見て、そのありのままの生態の嬉しさを書き写した、いわば描写の句と読む。そして、その陰には一茶の蠅との親しげな交感があり、それがアニミズムというものなりと見るのである（『古典』265）。

金子が「双方」と言うように、蠅を打とうとする者と、それを制する者との二者に、この句の蠅は囲まれている。〈拝んでいる蠅に慈悲を〉という訴えとして一般に受け取られ、それゆえ一茶を〈慈愛の人、徳の高い人〉と見る、偏った一茶観を生んできた句の一つとも言われる。だが、確かに慈悲の句とも読めるのだから、金子のように、「描写の句」と限定する必要はないように思う。命令の「打な」はやはり強く響く言葉なので。

しかしながら、その慈悲というのは滑稽味に包まれた軽さを帯びてはいる。その軽さは、〈命乞いに手ばかりか足まで擦り合わせて拝んでいるじゃないか〉というユーモアから来る。この句のアニミズム感覚は、「打な」の命令形（殺されかけている蠅への感情移入）と、〈蠅が拝んでいる〉と見る擬人観に現れている。

次の句に移る。

嗅で見てよしにする成猫の恋 七番日記 化一二 (122)

この句については、金子のアニミズム評も一言だけで、「恋猫はことに一茶のアニミズムを満足させるものだったようだ。」（『古典』267）というもの。

この句は、嗅ぐ方と嗅がれる方の二匹の猫を登場させ（「よしにする」を擬人化と取るかは迷うところ）、先の赤馬の句と同じように、双方の出会いに焦点が当てられている。同じタイプの感情移入によるアニミズム俳句と言える。

六句目に移る。

紅梅にほしておく成洗ひ猫 七番日記 化一二 (199)

金子の評は、「その景を、飼主が洗って、『ほしておく』いたようだ、と描きとるところに一茶のアニミズムが呼びおこした諧謔（フモール）がある。」（『古典』268）としている。一見、単なる描写の句とも読める。しかし、ここまでの分析結果に照らして、この句もアニミズム俳句と解釈したい。というのは、この句にも二者の関係性が含まれているからである。洗って、干した行為者は人で、紅梅近くには今、濡れた猫がいる。「成」の詠嘆の中に、洗われ、干されている具合への、猫の身を通しての想像、すなわち感情移入が現れていると感じられる。

#### 4 アニミズム俳句の型

アニミズム俳句とはどのような表現か。六句を見てきたところで、便宜的にタイプ別にまとめ、アニミズム的文学表現の識別のものさしの一つとしておきたい。まず一つは、木の擬人化のように、擬人化する言葉遣いがあり、人以外のものを擬人観によって感覚している型。この型は、もし背後に擬人観はなく、擬人法的修辭を用いて事物のあり様を描こうとしているだけと解すると、あり様の不明瞭さゆえに意味が判然としなくなる場合がある。この点もこの型の判断の一つの目安になる。二つ目は、擬人化する言葉遣いは含まないが、双方の関わり具合に焦点が当てられ、人以外の一方または両方への感情移入が起こっている型。最後は、対象をカミと感じていることがわかる型である。

上の三つの型に当たる一茶の句を全集第一巻の発句集から五句ずつ拾ってみる。まず、擬人化する言葉遣いのある型。

花びらに舌打したる蛙哉 七番日記 化七 (158)  
夏山や一人きげんの女郎花 七番日記 化七 (274)  
留守にするぞ恋して遊べ庵の蠅 七番日記 化一二 (374)  
焚〔く〕ほどは風がくれたるおち葉哉 七番日記 化一二 (731)  
大寒と云顔もあり雛たち 八番日記 政四 (108)

次に、擬人化する言葉遣いはなく、感情移入が現れている型。

今迄は踏れて居たに花野かな 秋顔子 寛二 (489)  
地車におつびしがれし堇哉 文化句帖 化一 (183)  
五六間鳥追けり親雀 化五六句記 化六 (127)  
風の尾を追かけ廻る狗哉 七番日記 化一一 (45)  
馬の草喰ふ音してとぶ螢 七番日記 化一一 (359)

最後に、靈性を帯びたカミの登場する型。

年よりや月を見るにもなむあみだ 文化句帖 化二 (455)  
冷つくや背すじあたりの斑山 連句稿裏書 化四 (439)  
石仏誰が持たせし草の花 七番日記 化八 (553)  
ぼた餅や地蔵のひざも春の風 七番日記 化一一 (77)  
形代に虱おぶせて流しけり 七番日記 化一三 (286)

いざ分類を試みようとする、どの型に入れていいものか迷う句も出てくる。擬人化であり、感情移入でもあるという句もある。タイプ分けのねらいは、精緻な分類にあるのではなく、アニミズム詩かどうかの判断の目安として有効と考えている。

一茶の句集から、典型的な例を取り出し重ねてみると、一茶の擬人観的感性の豊かさが確信されてくる。すると、次のような、単なる擬人法的修辭と取れそうな表現にも、アニミズム感覚が働いているように見えてくる。

秋の夜やしやうじの穴が笛を吹 我春集 化八 (445)

障子の穴を〈人〉と感じるとき（そのように読むとき）に、諧謔とともに侘しさが強く立ち込めてくる。

次のように、描写の句なのだが、双方への感情移入が働いているように見えてくるものもある。

寝た犬にふはとかぶさる一葉哉 七番日記 化一一 (588)

擬態語「ふわと」が、アニミズム的解釈を誘う。犬と葉との邂逅に、〈私〉は喜びを感じているのだ。

## 5 おわりに

本論では金子兜太の一茶論・アニミズム論を参考にしながら、一茶の句を題材にして、文学表現の中にアニミズムを読み取る作業を試みた。今回、表現のタイプの便宜的な分類を行ったことで、今後、アニミズム詩かどうかを判断する作業用の一基準を設けることができた。以前の論では、〈感情移入あるいは単なる擬人法ではない擬人観が現れている表現〉という、大づかみの条件を示したのみであったのに対し、今回は、判断のためのさらなる観点を見出すことができた。

ここで、以前の論で取り上げた松尾芭蕉（1644-1694）の句、

閑さや岩にしみ入蟬の声 (276)

を、本論での考察を踏まえ、再度検討してみる。「しみ入」を擬人化と取るかは迷うところであり、一つ目の型には入れづらい。この句は、「岩」と「蟬の声」の双方の関わり具合に焦点の当たる、感情移入の型のアニミズム俳句としたい。

日野草城（1901-1956）の次の句も再検討しておく。これはアニミズム俳句と言えるだろうか。

朝顔やおもひを遂げしごとしぼむ (平井 309)

この句における直喩「ごと」の使い方が、擬人観が働いているとは受け取りにくくしている。朝顔のはかなくしぼんだ姿を描写するために、「おもひを遂げしごと」という情緒的な、擬人化の修辞を使うことで、エロスを漂わせるのが意図なのだろう。擬人化を含みながらも、この句はアニミズム俳句とは言えない。

今回、金子の論から学んだのは、アニミズムを〈感覚〉として捉える視点である。この視点により、地域や時代を広げて、アニミズム的文学表現を探索していくことができる。〈洋の東と西、過去と現在との間につながりを見出せるような、幅のあるアニミズム概念〉の模索への道が開けてきたように思う。今後は、本論で設けた作業用基準を用い、アニミズムを読み解く対象作品・作者を広げていきたい。また、各作者のアニミズム表現を比較することで、各作者のアニミズム的思考の特徴なども明らかにしていきたい。



## 註

- 1 擬人観とは、人間ではない物や出来事・現象に人間の性質を当てはめて見る感じ方、考え方のことであり、以前の指摘は、拙論（松崎慎也「詩にアニミズムを読みとるために」『群馬県立女子大学紀要』第38号，2017年）の中で行った。
- 2 一茶の句の引用はすべて、信濃教育会編『一茶全集』第1巻／発句に依る。括弧内の数字は、この巻のページ数を示す。

## 引用文献

- Keats, John. *The Letters of John Keats 1814-1821*. Ed. Hyder Edward Rollins. Vol. 1. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1958.
- Rollins, Hyder Edward, ed. *The Keats Circle: Letters and Papers and More Letters and Poems of the Keats Circle 1816-1878*. 2nd ed. Vol. 1. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1965.
- 金子兜太『古典を読む 一茶句集』同時代ライブラリー252，東京：岩波書店，1996。
- ，佐佐木幸綱『語る 俳句 短歌』東京：藤原書店，2010。
- 『荒凡夫 一茶』東京：白水社，2012。
- ，村上 護『対談 一茶・山頭火一定住と漂泊』東京：本阿弥書店，2013。
- 「秘蔵インタビュー 金子兜太『今、伝えたいこと』」『俳句』2018年5月号：62-65。
- 信濃教育会編『一茶全集』第1巻，長野：信濃毎日新聞社，1979。
- 白川静訳注『詩経国風』東洋文庫518，東京：平凡社，1990。
- 平井照敏編『新歳時記（秋）』改訂版，東京：河出書房，1996。
- 松尾芭蕉『松尾芭蕉集1』井本濃一，堀信夫注解，新編 日本古典文学全集70，東京：小学館，1995。

